

子どもの本のひみつ

(題字・イラスト 陣崎草子)

2019年3月9日、新潟県糸魚川市のビーチホールまがたまで、「連続トークイベント 子どもの本のひみつ⑤」が開催されました。トークゲストは山崎玲子さんと荒木せいおさん。楽しいお話の中からほんの少しだけご紹介を…。
(まとめ 田中すみ子)



山崎 玲子さん

子ども時代、『若草物語』の活発なジョーに憧れていました。また、大変なことやつらいことがあった時は、『赤毛のアン』のように、いろいろな空想をして楽しむ子どもでした。

(子どもの頃の本のとかかわり)

中学生の頃から心の整理をするために文章を書いていた。書くことが好きで、やがて、同人誌に入り仲間と合評をするようになりました。

(子どもの本を書くきっかけ)

歴史や動物と人間の関係に関心があります。そして、骨にも興味を持ちました。物語の地名や神社名を**実在する名前にしたのは、場所や土地の空気をイメージしやすいから**です。

(『きつとオオカミ、ぜったいオオカミ』について)

短い時間で展開し、大人が介入しない旅です。「目的」が主人公の心と体を動かし、「未来」と遭遇すること。大切なのは「行って帰ってくる」ことだと思います。

(児童文学で「旅」を書くとは)

映画が好きで、学ぶことがいろいろあります。まず、『スタンド・バイ・ミー』を思い浮かべます。大人になった元少年の一人が回想しているのに、**その感覚がリアル**です。

(映画で描く旅について)

人生を生きてきた大人が子どもたちへ伝えたいことを書いた作品。「子ども」をどう定義するかというと、「**未来へ向かう人**」です。実際の子どものみだけではなく、大人も、老人だって「未来へ向かう人」と言っている。

(「児童文学」とは)



荒木 せいおさん

中学生の頃に読んだ『天平の薨』で、僧の業行が長い船旅の間に書き写した経典が、嵐によって全て海へ流されます。業行の行いは無駄だったのかと問われたようでした。**無駄ではないと言いたいが、本当にそう言い切れるのかと、今でも考えています。**

(子どもの頃の本のとかかわり)

『天平の薨』のように、**うまくいかなくても無駄じゃなかったという話を書きたいと思ったから**です。

(子どもの本を書くきっかけ)

自分はこういうキャラなんだと自己イメージを抱いていても、それが崩れるときってありますよね。**きっと子どもにもあるわけで、そこを書けたらいい**なと思いました。

(『冒険は月曜の朝』について)

主人公を女の子にすることが多いです。男にすると、作者の自分自身が出過ぎてしまうんですね、女の子にすることで、**自分との距離が取れて、わりと自由に書ける**んです。

(主人公と作者の距離感について)

『スタンド・バイ・ミー』は好きです。ラストで主人公には町の風景がそれまでとは違って見えるシーンがあります。**旅を経て一つ大人になった、何かが変わった**ということです。

(映画で描く旅について)

登場人物が、少しだけ成長するとか何かを手に入れたりするという**イニシエーション(通過儀礼)**の物語を書きたいと思っています。

(「児童文学」とは)

山崎 玲子 (やまざき けいこ)

長野県出身。日本児童文学者協会理事。著書に『もうひとつのピアノ』『風のシャトル』『きつとオオカミ、ぜったいオオカミ』『ぼくらのシャロン』(いずれも国土社)など。60年以上の歴史を有する信州児童文学会(会誌として『とうげの旗』を発行)の事務局長。2015年の児文協・信州セミナーでは、総監督として敏腕を振るう。また、県内の短大で講師として児童文学を教える。

『きつとオオカミ、ぜったいオオカミ』 (国土社)

もうすぐ五年生になる真砂人は、春休みに山で本物の骨を見つける。これ、この前科学博物館で見たニホンオオカミの骨かも! だってオオカミはこの山の守り神だから。そこで、一人上田から新幹線に乗って科学博物館をめざすことに。ところが、道中、どういわけか連れができて……。この旅は、どうなる? そして見つけたのは、ほんとうにオオカミの骨なのか?



荒木 せいお (あらかき せいお)

新潟県出身。小学校の教員として勤務するかたわら(2016年に退職)、児童文学の同人、サークル・拓を主な活動の場として、評論・創作を執筆。主な評論に『肯定する覚悟一廣越たかし論』『希望の語り方』などがある。創作では、2018年出版の『冒険は月曜日の朝』(新日本出版社)が初の単行本。

『冒険は月曜日の朝』 (新日本出版社)

音楽会の振替休日の月曜日。六年生の風花とクラスメイトの賛晴は、河口湖をめざすことに。風花には、どうしても河口湖に行きたいわけがある。そこで、鉄道に詳しい賛晴を巻き込んだのだ。ふたりの珍道中は無事、目的にたどりつけるのか。いやいや、目的よりも途中経過が大事というか、いろいろあって。二人のおりなすささやかな非日常は、目的が達成されるかよりも、大事なはその過程で何を受け取るか、かも。



(作家・作品案内 濱野京子)

ママと行ってみよう!

糸魚川・駅北大火の後を歩く

「子どもの本のひみつ」第五回は、二〇一九年秋に行われる「糸魚川児童文学セミナー」のイベントとして、新潟県糸魚川市の海岸に向かつて建つ「ビーチホールまがたま」で開催されました。建物名から連想される通り、糸魚川は、勾玉の材料としても知られるヒスイの日本最大の産地。「古事記」にも登場する奴奈川姫は、この地で生まれ、美しいヒスイの玉を身につけ、出雲の大國主命と結婚し……と伝説の豊かな地です。地形的にも、日本列島の中央に潜む大地溝帯フォッサマグナの西縁、糸魚川―静岡構造線の端に位置し、糸魚川駅のアルプス口(南口)には山々が迫っています。一方、日本海(北口)は、駅前からまっすぐ四〇〇メートルも行けば、まさに日本海。その手前で加賀街道を左に折れば「本町通り商店街」があり、児童文学作家小川英子さんの実家がかつては葉茶屋だった「旧倉又茶舗」もあります。今では、「糸魚川の町屋文化を守り伝える会」の拠点として、町屋造りの建物や生活の道具などを保存、公開しています。並びや向かいには、造り酒屋や蕎麦屋、仏具屋、菓子店、陶器店などが並び、歩道に木道の庇がせり出す雁木のある通りは、雪国らしい街並みを残していました。

ところが、二〇一六年二月二日、駅北側のラーメン店から出火。火は、海岸線まで燃え広がったのです。統計的に見れば、決して消防防炎力が劣っていたわけでもなかったようですが、山から吹き下ろす強風、瓦屋根への飛び火などの影響もあって、大規模火災に。「本町通り商店街」も半分くらいに焼け落ちてしまいました。しかし、ひとりの死者も出なかったことは根底にあるコミュニティ力を感じます。また、焼け跡の中に残った奇跡の家(準防火家屋)や、木に守られた祠など、興味深い現象もありました。それから約二年。今では、新築の家や店、工事中の集合住宅などがあちこちに見られ、もはや「焼け野原」という印象はありません。酒造「加賀の井」や蕎麦処「泉家」など再開した商店もあり、道を広くしたり、地下貯水設備のある広場が作られたりと、災害に強く、にぎわいのある街づくりが目指されています。辛くも難を逃れた小川さんの「旧倉又茶舗」や、商店街の角に開かれた「復興まちづくり情報センター」は、市民の寄り合いの場、相談の場、情報交換の場として、復興の翼を担ってきました。豊かな伝説や特徴的な地形に加えて、蔵文化のこれまでとこれから、再建した店・閉じられた店、困難な雁木の再生、まちづくりのための市民活動など、大火を経てなお、この地には伝えるべき物語の種がたくさんあるように思えました。(奥山恵・協力糸魚川歩きガイド・久保雄さん)

児文協研究部「連続トークイベント 子どもの本のひみつ」編集後記



第6回 新潟県

トークゲスト **横沢 彰 × 吉野 万里子** 司会 奥山 恵
日時 2019年9月21日(土) 午後
場所 ヒスイ王国館
(JR糸魚川駅 徒歩1分)

第7回 神奈川県

トークゲスト **宇野 和美 × 池田 ゆみる** 司会 濱野 京子
日時 2020年1月11日(土) 場所 神奈川某所

第8回 愛知県

トークゲスト **村上 しいこ × いとう みく** 司会 林 美千代
日時 2020年3月28日(土) 場所 名古屋某所

●どなたでも参加できます! ぜひどうぞ。
詳細は、日本児童文学者協会 HP にて
<http://jibunkyo.main.jp/>

発行 日本児童文学者協会 研究部 2019年6月